

5-10		主題	重度化にともなう余暇活動のあり方	
活動		副題	利用者の日常の中の居場所と過ごし方	
研究期間	24ヶ月	事業所	介護老人福祉施設・特別養護老人ホーム信愛緑苑	
発表者：伊藤賢司（いとうけんじ）		アドバイザー：		
共同研究者：小林知子（こばやしともこ）				
電話	042-367-8080	メール	midori@tama-dhk.or.jp	
FAX	042-367-1012	URL		

今回発表の事業所やサービスの紹介	東京都府中市に養護（50名）併設の特養（30名）として在宅から養護をへて、特養に移り住む事で同じ場所で永く生活して頂けるようにと平成6年4月に事業を開始しました。当時は養護からの入所が多く、比較のお元気な方の割合を占めていましたが、介護保険開始後は地域からの入所（重度の方）が主体となっています。また、在宅介護支援センターも併設され地域福祉の一翼を担っています。
------------------	---

<p>《研究前の状況と課題》</p> <p>平成14年頃から、「夢実現」と銘打って入所者ひとり一人に希望を聞き、様々な余暇を行ってきた。温泉・パチンコ・外食・植物園などへ出かけ、寿司やピザなどの外注も活用し、年2回のバスハイクと月に1度は何か楽しみを、と関わりを持ってきた。しかし、入所者の重度化にともない、職員は日常の介護に追われてしまい、徐々に集団の余暇活動ができにくくなってしまった。平成19年頃より、入所者にとって「ほっとする時間」となるような活動を行おうと模索し始めた。「発言が出来ない・動けない・外食が難しい・理解が出来ない」入所者に対して、どのようなことを行えば満足してもらえるのかについて課題として残った。</p>
---

<p>《研究の目標と期待する成果》</p> <p>体力・意欲の低下が著しい入所者に対して、その方に何が合っているのか、何を望んでいるのか、本人の気持ちを考えながら余暇活動内容を見つけ実施していく。そのためには、本人の生活暦や家族からの話なども重要な情報源とし、表情の変化や心の穏やかさが解る様に、またその状態が続くようにしていきたい。</p> <p>その変化を記録へつなげ、職員間でも情報を共有しながら、その方へのアプローチする意味合いを考えられるようにする。</p>
--

《具体的な取り組みの内容》

普段から関わりの中で、何が好きか・若いときの趣味・何に興味を持っているか・今何がしたいか、など、本人の希望を聞き感じとる。年2回の利用者懇談会、家族懇談会からも情報を得る。得た情報を基に年間計画を立て、実際に活動を行う。また、日々の記録の中で、何が本人について余暇に繋がる「ホッとすること」なのかを考え個人の関わりを持つ時に役立てていった。(例えば映画を観ている時にはとても良い表情であった。等)  
又、環境面でもソファを共用スペースに設置をしたり、ベランダスペースにボランティアをお願いし、季節ごとの花の管理をしてもらいながら視覚でも楽しんで頂ける工夫を行った。

《取り組みの結果と評価》

1日の出勤数が決まっている中で、特別に個別的な関わりを持っている時間は、自分の仕事を他職員に任せる事で負担が行ってしまっている。

どうしても、1日の中で関わられる時間は短時間しか取れないため、訪室時の数分で寄り添う事が主となってしまっていた。その中でも調整できた中では苑庭でおやつを食べたり、季節ごとの散歩、数名の夕食等が行えた。

余暇というものについて、担当自身が何の為にやっているのかという意味合いを深く考えられずに、「担当だから」と業務をこなしているだけの部分が多い。この件に関しては現在もフロアでの意識共有方法を模索している最中である。

《提案と発信》

養護との併設という事もあり、納涼祭やカラオケ大会、餅つき大会等の地域合同で行う年間行事では参加利用者もよりいっそうの雰囲気を感じられ、季節感を味わう事が出来ている。このように地域との関わりにおいては在宅支援センターが上手に架け橋となり、福祉施設というものをご理解いただき、ボランティアの活用時など大きな力となっている。

【メモ欄】追加資料 有 無